

後醍醐天皇を支えた側室・阿野康子

「建武の中興」で有名な後醍醐天皇について皆さん日本史で習ってご存じだと思うが、「元弘の乱」で隠岐の島に流された後醍醐に同行して支え、島脱出の時も行を共にし、その後も南朝の国政に関与した女性がいたことは、案外知られていない。

その名を阿野康子（れんし）という。後醍醐天皇の中宮（皇后）・西園寺禰子の内侍として務めていたがのちに側室となった。康子は地味な存在で、美貌で和歌の才能に溢れる禰子に対し、裏方的な実務能力に優れた女性だったようである。

後醍醐天皇の皇子・大塔宮（護良親王）は、父天皇のため、鎌倉北条政権を倒すべく粉骨砕身「元弘の乱」で活躍するが、やがて父・後醍醐とのすれ違いが多くなり、最後は鎌倉に幽閉され斬殺されてしまう。後世、悲劇の皇子として伝えられる。後に鎌倉宮の祭神として祀られ、現在でも鎌倉宮社殿の裏側に、皇子が幽閉された洞窟が残されている。

鎌倉・北条政権を倒し後醍醐天皇の「建武の新政」が動き始めた頃、それぞれが政権成立に功のあった足利尊氏と護良親王が対立するようになる。この両者と近い関係にあった康子は、二人のうち、護良親王が、将来、我が腹を痛めた皇子・義良親王（後の南朝方・後村上天皇）の立太子冊立に障害となる可能性を感じる。康子は後醍醐天皇に讒訴して、征夷大將軍だった護良親王派の武将の恩賞を少なくする、北畠親房を動かして奥州の兵力を都に移動させる、鎌倉に將軍府を発足させるなどして、護良の勢力を削ぎ不安定にする策謀を重ねた。不安を感じた護良親王はライバル・尊氏を批判するが、後醍醐天皇には届かなかった。

南朝時代にはその政治的能力を発揮し、「新待賢門院令旨」を発したり、寺門所領を安堵するなどの施政を実施した後醍醐天皇親政を支えている。

軍記物語「太平記」では傾国の悪女と評され、後世「尼將軍北条政子を彷彿とさせる」といわれる。